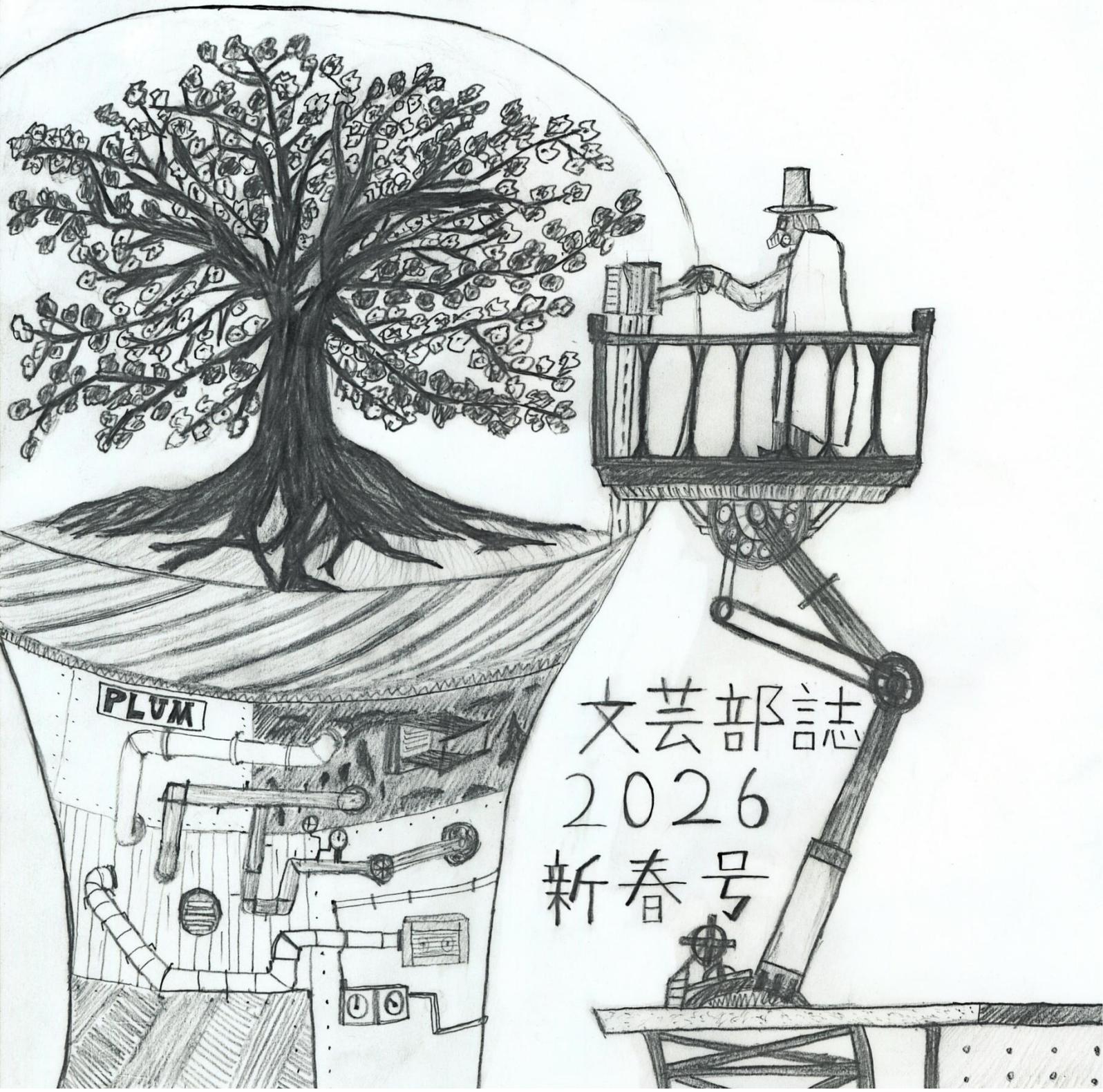


Lapis

Lazuli



文芸部誌  
2026  
新春号

# 目次

ひとりぶん	海葵	……三	酒&カス	宇津朝陽	……二十二
小さく静かで清潔な			蒸気の城のアリス	chapter1	
	日々規	……四	超矮小		……二十八
遺書.exe	蟻 まい	……六	太陽の焼き方	明倉有斗	……四十四
N次元球	迷走少女	……八	あとがき		……四十七
Useless	春日あるみ	……十一	編集後記		……四十八
2025 白選	宵蘭	……十九	文芸部情報		……四十九
悠々美適	宵蘭	……二十			
ReRe：新春紅白歌合戦					
霧雨 蒼		……二十一			

## ひとりぶん

海葵

二人分に慣れてしまったので  
一人分が分からなくなっている  
一合の米は一人には多すぎて  
炊きすぎては冷やしている  
一人の時はやる気が出なくて  
名前のないものばかり出来る  
出来ることなら毎食  
一緒に食べたいのだけれど  
現実的にはそうもいかないの  
大人しく冷飯を食っている  
俺にもっと金があれば  
彼女はずっと隣にいてくれるだろうか  
腐った言葉を飲み下しては  
浅ましさが舌にこびり付いて離れない  
最近読んだ小説のせいかな世の中  
囲い込みたがる人間ばかりな気がしている  
時代遅れはいつも最後には捨てられてしまっ

どこに行くんだらうか  
結局のところ  
強いように振る舞う彼らは紛れもなく弱い人であ  
って  
自分のつくったものだけを食べてほしいなんて願  
いは  
それと変わらなくて  
僕も彼らと同じ弱い人間であるけれど  
もう一人では生きていけそうにないので  
せめて一人の夜には  
味噌汁ぐらいは一人分で作れるぐらいに  
強くなりたい

小さく静かで清潔な

日々規

終わることのない反射があり、私は跳ねる魚を見た。背びれに溜まる水滴に、この部屋が映る。小さく静かで清潔な部屋。プラスチックの椅子。木の机。木の本棚。ガラスの蛍光灯。畳の下には静かな海が広がる。私は畳の隙間から、その海を覗き込む。冷えている。魚たちが揺蕩っている。眠っているのだろう。蛍光灯が鱗を照らす。稚魚が一匹目を覚ます。稚魚は深く潜って行って、すぐに見えなくなる。私は顔を上げる。

光は光に反射するほど強い。

畳に寝そべって、頬にイグサのささくれを感じる。微かに波の音が聞こえる。目を閉じる。そうやって息をひそめていると、瞼の裏になにか曖昧な風景が立ち現れる。どこかの町。私はその町の詳細を知りたいと思う。風が吹いて波が乱れる。町は消えてしまう。後には暗闇が残る。私はまだ目を閉じている。沈んでいく。澄んだ水の中をゆつくりと降りていく。周りを魚たちが泳ぐ。それ

は美しいことであるように思える。窒息の苦しさを、私は想像できない。

海の底には水がある。

この部屋の外には何も無いのだと、そう思えそうな気がする。窓から見える曇り空もその想像を妨げはしない。外は全てその曇りのようなものでしかないのだ。その曇りのなかにこの部屋はぼんやりと浮かんでいる。ゆつくりと回転している。じつと見つめなければわからないくらいゆつくりと。その部屋のなかに多分私はいないのだ。私もまた、その曇りのようなものなのだ、そのように思うのはもう少し後。

水面は徐々に上昇している。

たまに大きな生き物が窓の外に現れる。それはじつと部屋のなかを覗き込む。私はその緑の光る目が怖い。そういうとき、私は波の音に集中して、無心に、それが立ち去るのを待つ。でも、もし決心さえすれば、窓を開けて手を伸ばし、そのつるりとした肌に触れる、そういうことができる。

魂は存在する。

いらなくなる。いらなくなったものは沈む。沈んだものは引き上げられない。いられなくなる。いらつく。いらつく。私をいらう舌はつめたい。舌乳頭のざらつき。さらめは甘い。避けた唾が畳に染み込んでいく。

いらつく。

水面は蛍光灯ギリギリにまで上がって、そこから増えも減りもしない。

私は自分の意思をもって自殺を行いました。

追い詰められているわけでも過去に囚われたままでもない。恵まれていてもつたいたくなくてただただ幸せです。私幸せです。私は心臓の鼓動を止められないように自殺を止めることにはできないだろう。どんなに小さな時間を取ってきても死にたいと思っている。どんなに大きな時間を持ってきても私は生きています。だから私は生きていける。自分の体が自分によってコントロールできないように、風邪をひいて高熱でうなされるように。生きていくこと、自活し、洗濯物を畳み、朝起きることは難しいけど生きていることはできる、机の下で丸まっただけで果たされるものだから。私は死にたいとも苦しいとも思っていないんです。ただ説明すれば私の貧相な語彙では希死念慮になります。大丈夫と尋ねられれば大丈夫と返します。首をかしげてうふふと笑います。死のうとして自殺したひとはいるのかしら。私大学生なんです。この気持ちを楽しいというならこの気持ちを若さというならきつと死ぬし

かない。世界は歩み寄ってくれていきつと私に合っている。これ以上はないというくらいに。だから今日まで生きてこられた。感謝の気持ちしかなくてそれを裏切るように死が溢れる。恋と呼ぶように縁がなかった。自殺未遂も自傷もしたけど朝が来たら目が覚めるくらい自然なこと。苦しくないよ、死にたくないよ。だから悲しいことじゃないよ。死にたいって涙。悲しい時は勿論。うれしかったり感動したり感極まったときに零れ落ちる。最近是比较的安定していて苦しくも悲しくもないです。すこしフラフラ、クラクラします。それと例えるなら何か忘れてる感覚に似た感情があります。自殺してないし、だれもおこってないみたいだしこれでいいんだよ。世界も変わるし見てる私も変わるし生きるって素晴らしいんだよ。したいことを聞かれると何も答えられません。ご飯も食われて殴られもせず雨風をしのげてこれ以上何を求めればいいのでしょうか。おなかいっぱいになるときに食いたいものを聞かれても困るでしょう。どうか眠っているあいだに私が死にますように。死ぬのって怖いんです。苦しいんです。苦しいから首吊りのひもを鋏でチョンしたんです。「怖」って字、壁から滴る血みたい。理由はわかりませんが私は涙を流せません。首を吊るのと同じくらい丁寧に髪を撫でる。夜は眠るし昼は起きてられないし私は昼と夜どっちの世界にもいられない。お月さまを抱いて眠る。寂しい、不

安、イライラ、四肢がバラバラになる感覚。レポートをしなければいけない、やる気がしない逃げたい。私は叫ばないでいられる。誰かを殴ることも自分を傷つけることもしないでいられる。酒も飲まない。外に飛び出さないでいられる。どこにも逃げ場はないことを知っているから。記憶だけはあるの、でもこの子は死んでるの私が体だけに乗っ取ってしまった、生きないと思って思うけど早く返してあげないと。私の中にたくさんの私がいって周りにアクションを起こすときにはその波がピタッと決まる。矛盾が生じてもどっちも本音。私は好きなもの嫌いなものも全部抱き締めていられる。ほんとは基準なんてなくて観察したときにだけ表象に現れるだけ。嫌いなところもなくまるごと全部好きで死にたいとも生きていとも思っなくて幸せからも遠い場所にいてただ自殺は禁じられてるってだけ。普通に生きられないというか人と違うことを受け入れられない心細さがある。私の物語が一番面白くて好き。快・不快を決めなければ全部まとめて愛せる。コレってゼツボウ？ 視界が上から下に流れていく。とても気が楽。私が酔っぱらってるのバレてないの？ どうしてお酒を飲んでしまうんだらう。でも、体の重さに引つ張られるのは楽だ。でも普通でないといけない。一人だと横になっただけでいいのに。

またあした 人生やめたい 冬かもね



## Ⅲ次元球

### 迷走少女

「Ⅲ次元空間における半径Ⅰの球の体積ってね、ⅢⅠⅠで最大でそれ以降はどんどん小さくなるんだ」

ガタゴトと揺れる電車の中で、彼女は不意に声を弾ませた。視線は窓の外はどこか遠く。私の事なんかこれっぽちも気にしないで、自由気ままに捲し立てる。

「これって結構面白いことだと思わない？ 半径は同じⅠなのに、ⅢⅠⅠの円の面積よりもⅢⅠⅢの球の体積よりも、ⅢⅠⅠの四次元球の体積の方が大きいんだよ？ やっぱり次元が大きい方が体積が大きいんだなあ、つてなるんだけど、そこから先はずっと小さくなるばかり。不思議だよね」

「うん、凄いな」

適当な相槌を返すと、彼女の表情がぱあっと明るくなる。

「だよねだよね！ まあ、次元が違う空間の単位球の大ききなんて比べてもしょうがないのかもしれないけどさ、初めて知ったときはすっごく驚いたよ」

「そうなんだ」

「でも、本当に面白いのはここからなんだよ」

ぎゅっと私の手を握り締めて、彼女は無遠慮に身体を押し付けてきた。柔らかな感触とパンの甘い匂い。その幸せな配分に、眠くなってきた意識が一瞬で覚める。  
「……そう、なの？」

「うん！ 実はね、高次元における球の体積ってね、もうほとんど殻の部分に集まってるんだよ」

「ふうん」

「Ⅲ次元空間で言ったら、卵の殻の部分に体積が集中しているって言えばいいのかな。1229次元空間にでもなったら、ゆで卵の薄皮の部分で99%以上の体積を占めると言っても過言じゃないんだよ」

彼女が何を言っているのか私にはさっぱり理解できない。だけど、彼女が楽しそうに喋っている姿を見ていたくて、どうにか話題を探す。

「今日の晩御飯はゆで卵……使ってもいいかもね」

「やった！ もしかして、結愛ちゃんが作ってくれるの？」

「せっかくだから橙花に私の手料理、食べて欲しい、か

な

思わず声が上がって顔を背ける。別に、友達が泊まりに来るからご飯を作ってあげるだけなのに。

橙花に変に思われてやしないか心配になって視線だけ向けると、彼女は満開の笑みで私に飛びついてきた。

「結愛ちゃんの手料理なんて絶対美味しいよね！」

「そんなことないって。普通だよ」

「ううん、絶対美味しい。私が保証するよ！」

どん、と自分の胸に手を当てて自慢げに反らす。そんな彼女の姿を見て、私は思わず笑みを漏らした。

「なにそれ。食べたこともないのに」

「甘い良い匂いのする女の子は料理上手って相場が決まってるんだよ。結愛ちゃんみたいにほかほか暖かい優しい雰囲気なら、尚更」

「それなら橙花だっという匂いがするから、料理上手ってことになるよ」

もちろん、彼女に料理上手のイメージなんてないけれど。どちらかといえばカップラーメンと栄養ゼリーが良く似合う。

「ふっふん、私だっと思って作ろうと思えばクッキーぐらい作

れるんだからね」

「え」

「え、って何！もしかして結愛ちゃん、私の事家事ダメだっと思ってない？」

「そんなことは……ない、けど」

「ああ、今日逸らした！確かに講義には遅刻するし部屋は汚いし食事だっってコンビニばかりだけど、レシピに書いてあることをそのままやるぐらい、私だっって出来るんだから」

不穏な自白の数々に私は目を細めて呆れる。やっぱり橙花は橙花だ。ちゃんと見ておかないと心配なのは、昔とちつとも変わらない。

私はぎゅっと彼女の頭を抱き寄せると、子供に言い聞かせるように囁いた。

「今度橙花の部屋、片付けに行くから。見られたくないものはちゃんとしまっておいてね」

「結愛ちゃんに見られたくないものなんてないよ」

「本当に？」

「うん、結愛ちゃんにだったら全部見せてあげる」  
そう言うと、橙花は私の太腿に顔を埋めてきた。誰も

いないから良いものの、次の駅で人が入ってきたらどう  
するつもりなんだらうか。

私は彼女を払い退けようか少し考えて、止めた。あと  
数分だけ。夕陽が沈むまでの僅かな時間だけは、私と彼  
女の二人きりだった。



春日あるみ

ついでに。

私と彼女は窓際の席にテーブルを挟んで座っていた。私を呼んだにも拘わらず、彼女はいつになく思い詰めた表情で疾うに温くなっているだろうカフェオレを眺めて口を開かない。

「どうしたの優子、今日はなんでここに来たの？」

コーヒーを飲み干して手持ち無沙汰になった私は痺れを切らしてそう尋ねた。

「……うん」

深紅の薔薇が弱い風にそよぐように彼女は唇を微妙に動かす。しかし、そこから意味のある言葉は紡がれなかった。

今までに見たことのない彼女の極端な逡巡のさまに、私は得体の知れない未来への不安を感じた。しかし、生来私を突き動かしてきた潜在的な破滅への欲望が、彼女が語り始めることへの期待に化け、無責任にも私を語るせる。

「黙ってたらよくわからないよ。私は優子がどんなことを話したって受け入れる。わかっていると思うけど」

彼女は覚悟を決めたように小さく息をつき、私の目を

カーテンの隙間から射し込む白い陽光が瞼を包み込み、その抱擁に似たぬくもりに私は目を覚ました。体を起こしてベッドに座ると、裸足が床に触れた。足底に伝わる冷たさは、私が充足の熱を帯びていることを外から語りかけてくる。この充足の原因は、脳を劈くようなアラームを聞かない久々の起床だったからではなかった。長い年月を共に過ごした彼女を完全に理解し、そしてその先にある永遠が確約されたことから起こる純白の高揚感ゆえだった。

\*

——街外れの路地にある小さなカフェは、それが昼間の市街地の喧噪を超然と拒んでいるかのようには薄暗い、陰湿な場所であった。この隔世の陰湿さに私と彼女は惹かれ、いつしか彼女の休日はこちらに来ることが日常とな

見つめて話し始めた。

「私とミヅキってさ、もう二六歳になるじゃん、お母さんから電話が来て、結婚はいつになるんだとか小言言われるの、だから私たちも、そろそろ普通の人生を歩み始めた方がいいんじゃないかなって、思い始めたの」

彼女は覚えていた文章を諳んずるかのように一息で語る。最初私は、彼女の言うことの意味がわからなかったのは、その早口が原因だと感じた。しかし、その後続いた短くない静寂が嫌でもその言葉の持つ意味を私に反芻させた。

普通の人生？ 彼女とは五歳の頃からの仲だ。私にとって、またそれは彼女にとっても、共に生きることが普通の人生に違いない筈だ。それでも彼女が態々それと言ったということは、私の居る人生が普通ではないと思っ

ているということだろうか？  
「私たち、もうこういう関係はやめてさ、普通の友達として過ごそうよ」

沈黙を破る彼女の言葉は、私を守っていた杞憂の可能性を殺した。

それから彼女がなんと言っていたのか、どんな表情を

していたのかを思い出せない。私は自らの奔放な欲望を呪い、言動のひとつひとつをただ猛然と省みていた。なぜできもしないことをできると言ったのか。私の内部では精神と言葉さえ障子で隔てられているような心地がした。

気がついたときには彼女の姿はなく、机には私が飲み干したコーヒーマグの残滓が、マグカップの底の方でどす黒く乾いていた。

その日の彼女との最後の記憶は、伏目がちな彼女の顔の右半分の肌の白が、窓から差す日光を反射している映像だった。彼女の思い悩むような表情とは相反する、ある自然の強さを滲ませたその反射に、私ではない、他の誰かの存在を見た気がした。

\*

昔どこかで聴いたクラシックを鼻歌にしながら、私は洗面台の蛇口のハンドルをひねった。くすんだ銀色の蛇口は従順な忠臣のように私に呼応して、その恭しく垂れた吐水口から水を流した。

そうやって流された水を手で掬い、顔に当てる。冷たい水が顔の表面を這い、そこに苔のように積もっていた彼女の記憶を刮いでいくような感触がした。

私はその喪失感に怯み、咄嗟に顔を上げた。水垢で網状に亀裂が入ったようになっていた鏡が、私の顔を映していた。執着と怯懦で歪んだ、弱者の青い顔だった。高揚感とはまるで反対の私の様子は、水がある悪意を持って私に爪を立てたことの証であると思えなかつた。

しかし、それを現実のものとして受容しない程度の理性を私は持っていた。水に意思があるのではなく、そう感じる私の心理に問題があるのだろう。それは何？ 彼女が埋めてくれた私の心理には塵ほどの瑕疵もない筈であるのに。

カフェに彼女といた時と同じ類いの、もう感じることはないと信じていた不安が心臓を掌握しようとしているのを、タオルで顔を拭いて誤魔化した。

\*

——バイト終わり、街灯と通りの店から漏れ出る明か

りが地面に敷かれたタイルの正しい形姿を映そうと競い合っているのを避けながら、私はひとり歩いてきた。あの優子の告白以来一ト月、私の中には曖昧な絶望が蔓延していた。それは決まった形を持たないまま、しかし確実に私の生を削りつつあった。

この絶望を排除するにはある確信が必要であつた。しかし、その確信が霧のような絶望を払拭すると同時に、その絶望の形を過剰に照らし出してしまう撞着を抱えた存在であることに私は気付いていた。

だからこそ、私はそれに至ることを拒み続けた。

気がつくと市街地を抜け、路地を歩いていた。そこは寂れた煙草屋と古本屋、そしてあのカフェ以外は民家の続く路地で、うつつの煩雑な光を遮断する闇と寂寥を纏っていた。

その闇の中に、カフェの不相応に大きな窓から漏れ出る明かりが、長く続くトンネルの先に見える外界の光のようにアスファルトの地面に臥していた。待ち合わせには殆ど遅刻していた私は、窓をのぞいて彼女を探すことが常だった。その悪癖が、今日も私に店の中を覗かせた。

彼女がいた、あの日と同じ窓際の席に。でも、彼女は

一人ではなかった。私が居た場所に、スーツを着た同年代くらいに見える男が座っていた。

私は確信を得てしまった。絶望が私の裡を流れて季節外れの汗という形を持って現実に姿を現した。

彼女は大きくないテーブルを挟んで男と親しそうに話している。外に居る私には話の内容は全く聞こえなかったが、時折ふたりが見せる笑顔は、それが単なる仕事の堅苦しいものでないことを如実に表していた。

彼女のそんな様子は、私が翹望していた理想に他ならなかった。ついに私は理想を叶えることができなかった。しかもそれを結実させたのは、私がどうやっても至ることのできない「男」だった。その事実が新たな絶望として私の脳内を跳梁し始めた。

私はこの絶望を、彼女の行為を直視せず、ただ過ぎゆく儘を横臥していた私に与えられた褥瘡だと思った。そう、私の所為だったのだ！ 私の怯懦が産んだ当然の報いだったのだ！

そうならば私は己の罪を贖わなければならない。それは単に罰を受ければ良いものではない。その贖罪でいて私と彼女の未来を取り戻し、彼女のために私の全てを捧

げるようなものでなければならぬ。その方法はただひとつ、究極のものしか思い浮かばなかった。

見たことのない美しい笑顔を浮かべる彼女が、悖る私の視界に吞まれ輪郭を失っていった。

\*

不安を潰し自らを肯うため、再び高揚感を取り戻そうと考えた。鏡に向き直り、少しだけ口角を上げて鼻歌を歌う。それでも、私の顔に一昨日見た彼女の笑顔にあつたような豊饒な精気は宿らなかつた。むしろ、装飾された悲愴さが滲み出ているように見えた。

やはりあれは水の謀叛だったのだ。私と彼女の永遠を妬んだ水がふたりの間を裂くために立てた爪だったのだ。そんな思いが私の脳内に響き始めた。それは少女の夢想ではなく、確固たる質量を持つて響く現実でなければいけない。私の心理の完全性はそのような形でなければ保証されないような気がした。

それを示すためには、彼女にその思いを伝え、一言「正しい」と言ってもらえば良い。ならば、今すぐ彼女に会

いに行こう。

私は洗面所を後にして寝室に戻る。寝室には四畳間には大きすぎるダブルベッドと、その右隣に木調のクローゼットがあり、さらに右にはベランダに続く窓があった。レースカーテンが日光を白く染めて室内に導いている他は、カーペットも布団も薄桃色で、部屋全体が仄赤く染まっているように見える。

その使い慣れた私の寝室に一步足を踏み入れる。すると、感じたことのない違和感が私を襲った。自分の部屋である筈なのに、遙か異国の知らない土地に来てしまったような感じがした。少し前に抜け出た布団が皺を刻んでいるのすら、私の行為の結果であるようには見えなかった。

布団を載せたダブルベッドは、私が一人暮らしを始めたときに彼女が選んだものだ。組み立て終わった後、彼女はベッドが部屋の広さに対して大きすぎることに気が付き、恥ずかしそうに笑っていたのを覚えている。ベッドだけではない。この部屋のあらゆる物質は、彼女との思い出を含んで存在していた。

この部屋の？ 違う。私の周りに存在する全てが彼女

を含んでいた。それらは全て、彼女と過ごした日々によって与えられた存在であった。

なら私は？ 私は私によって存在していると云えるのか？ 彼女とは五歳の頃から共に時間を共有してきた。それ以前の私は存在していた筈だが、その記憶が既に失われている以上、その存在を保証するものは最早ない。すると、私の記憶はその全てが彼女に起因するものであり、即ち彼女によって造られたものであると云えよう。

記憶が彼女によるものならば、私の行為は全て彼女によるものということになる。私が自らの強い贖罪の意志で行なったものですら、彼女に始まる円環の一部に過ぎなかったのだ。

では、彼女にとって私とは？ 彼女は昔から私とは対照的に社会的で友人の多い人であった。彼女の記憶は、私以外の人間によって形作られた部分も多いだろう。実際、彼女は男とすら記憶を共有していたのだから。

つまり、彼女は私を記憶の片手間で翻弄し、その行為の全てを司っていたのだ。なら、私が彼女に与えられるものなど無い。私が与えようとしても、それは彼女にとって既知なもので、尚且つ瑣末なものである。

私が彼女に全てを与えて過ごす筈だった永遠が、その虚無の心臓を現実の風雨に曝したことによって瓦解していくように思えた。

足下の血溜まりは既に錆付いていて、もう私の姿を映してはいない。

\*

——寝室の扉がゆっくりと開き、彼女が怯えるように私を見ながら部屋に入ってくる。

「どうしたの？　こんな時間に」

彼女はその答えの見当がついているようだった。

「昨日、いつものカフェに居たよね」

私がそう言うと、彼女は少しだけ目を閉じ、何かを観念したかのよう

「見てたんだ、夕さんと居たところ」

と言った。

「でもさ、ミヅキのことが嫌いだからとかじゃないんだよ。でも、もう付き合ってるわけでもないし」

彼女に一步近づくと、私と彼女の間に空間は殆どなく

なった。私の方が背が高いので、自然と彼女は私を見上げる。

「ミヅキに悪いとは思ってるよ。私から無理矢理別れたようなものだし」

彼女の左頬にそつと触れる。未だに悪の爪牙を知らない柔らかな私を安堵させた。

「嫌な気持ちになったなら、ごめん」

彼女の白い頬には後れ毛が数本かかっていた。それは半紙の上に乗せられた湯筆のなす蹟のように幽玄な生命力を湛えていた。いま生命力とは私の仇であるから、私はすぐに指で髪を払いそのまま彼女の耳にかけた。

「怒ってるの？」

私は手で耳の輪郭をなぞり、そのまま顎に回す。何度も繰り返した一連の動作を、私は一ヶ月以上の時間の経過を感じさせないほど自然に行うことができた。

彼女に接吻をする。すると彼女の腕がそれを拒絶しようとする力を両脇に感じた。しかし次第に力は弱くなり零になった。そして彼女の腕は私の両腕を弱く抱擁した。私は彼女に受け入れられた。ついに拒まれ続けたこの一ト月は終焉を迎えた。後は彼女と共に究竟へ到達するだ

けだ。私はその鍵を鍵穴へ入れて回せばよいのだ。

背中で隠していた包丁を握りしめ、空いた彼女の右脇腹へ刺した。刃は少しの抵抗も受けず、まるで虚空を斬るかのように彼女のコートとその下の幾重もある衣服を引き裂き、奥にあるだるう肉の白に突き刺さった。

阿るような柔らかさを私に預けていた彼女の唇が鉄芯の入ったような堅さを帯び、その隙間から弱く息と声が漏れ出る。それでも彼女は抵抗などせず、むしろ縋るように私に体重をかけた。

私は目を閉じていたから、彼女がどんな表情を浮かべて私を見ているのかはわからない。それでも、唇から伝わる息遣いと預けられた体が私に響かせる鼓動が表情よりも雄弁にその感情と造形を語っていた。

包丁を握る手に伝わるコートに滲み始めた血の温もりに、私は誰も知り得なかった彼女の生とそれに纏わる美の濫觴に触れたのだと感じた。

\*

飛び石のように連なる血痕を慎重に辿る。飛び石は現

実が流れる鷹揚な大河にかかる石であり、私の理想へのか細く脆弱な最後の可能性であった。足をかければ石は揺らぎ、私は河へ落ちてしまいそうになる。河に落ちてしまえば、私はその緩流に抗うことすらできず流され、永劫這い上がることはできないのだと思った。

血痕はクロゼットへ続いている。私はその前に正座をして観音開きを開けた。中では彼女が横座りをし、左に傾いた上半身を内壁に凭れていた。右脇腹にある創傷からは乾いた黒い血が続き、彼女の白かった腿とクロゼットの底部を染めていて、着崩された裙のようにも見えた。彼女は首を前に垂れ、その長髪が御簾の如く顔を隠していた。

髪を左手で払って彼女の顔を下から覗き込んだ。唇は力なく開かれ、かつての湿潤を失っていた。眉根は強く寄せられていたが目は薄く開かれ、白く混濁した瞳が窺えた。その混濁は彼女の肌の白が滲んだものであるようにも見えた。しかし、そこには昨夜までの生きていた彼女には存在していた筈の美がなかった。瞳だけではない。昨夜、彼女の服を脱がせていたときには存在していた官能の美が、全身のどこにも存在していなかった。服はや

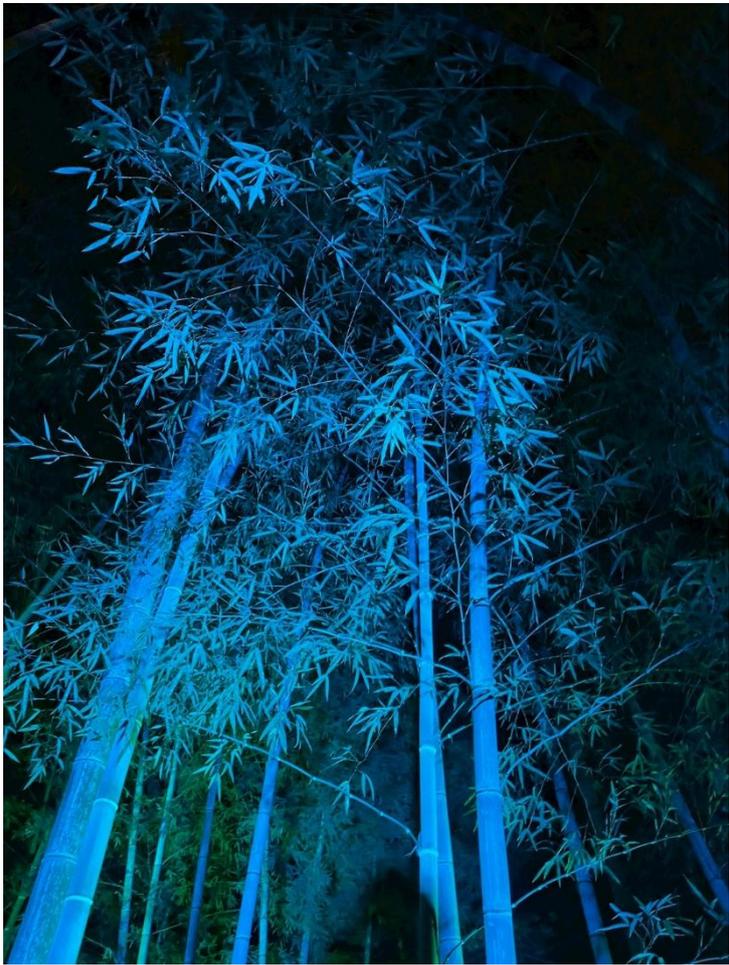
はり私と無関係な他者でありながら彼女の美が横溢していくのを防ぐ堰としてはたらいていたのだろうか？ 或いは美は深い創傷から外に逃れたのだろうか？ 否、彼女の美は白色をしていたのだから、クローゼット内の人工的な闇にも黒い血の涸れ川にも存在できる筈はない。

「ああ、持っていたのか」

私は悟った。私は河を渡ったにも拘わらず、ここは既に彼女がいる彼岸ではなかった。彼女は私から逃げよう、その美を連れてもう一つ向こうの河を渡っていたのだ。彼女の美なくしては生きていけない私がそれを得るために、あの河を渡るためにできることはひとつしかない。

彼女の前に供物のように置かれている黒く染まった包丁を右手に取る。着ていたジャージを胸のあたりまで捲り、包丁を左脇腹に当てる。彼女の生を動かし続けている血液に覆われているとは思えない、包丁が元来持つ金属の冷たさが広がった。躊躇いはなかった。柄の底に親指で渾身の力を込めて押すと、鋭い痛みが慥かに私の全軀に響いた。しかし刃は刺さらない。力を入れ続けると、包丁を持つ手が熱を帯び震え始めた。痛みは弥増してい

く。それでも尚、その刃が私の腹に切っ先を埋めることはなかった。



先人の愛も死もみな黒板に品詞分解されてく日暮れ

ポラリスを掬ひ取りたい前籠がふらりふらりと漕ぎ惑ひたる

乱されたぬばたま絡め巢をひとつ黒い糸では小指じや済まぬ

学童が並べた筆の火を見る私のどこかが燃やされている

今日の月0・5倍速にして走馬灯でのラスサビにしたい

指先に海を育てているのです童宮に沈む日を夢見ては

何一つ足りないものは無いけれど、そうだなアイスで埋めておいたら？



悠々美適

宵蘭

「おはやう」と指滑らせて午前五時少し優雅な私に出会う

使い方分からぬパールのハイライト早く私を光らせてみる

仰向けに濡れた命を握らせる君が不在の美容室にて

白い手と味の分からぬクリームを三つ揃ったレンズが喰らう

画面越し細身のグラスで乾杯を酔えやしないわ洒落の一つじゃ

紅が溶けて消えゆく昼の夢十の花爪だけが残って

ReRe : 新春紅白歌合戦

霧雨 蒼

紅組

「あいわなびー熟れた林檎は高望みタルトタンは欲張ったかも  
「おります」のボタン一つで数分の主演は私です深夜バス  
未到達花を辿って名を呼んで応えてあげるからポーロって  
風に乗る我が身を燃やし尽くすまでその場に留まり続けるために  
腹混ぜる缺は泣いて本当は繋ぎ損ねたヒトが泣いてて

白組

白詰草の四葉探していたときよ、あれを幸せと言うのよ  
ふわふわを丸めていけば塊に（来世は海月の骨がいいかな）  
バニラの香脳裏にこびりつくされど薄氷の上貴方は歩兵  
ざらついた進路希望調査は君の骨とおんなじ色をしている  
指切って？ 貴方の望むほど上手く覚えなくても見捨てないでね



「おい、もうそれ以上飲むな」  
手にはほぼ氷しか入っていないジョッキ。結露した水滴が一滴、床に落ちる。

「はあ？ まだ大丈夫だつて〜」

「酔っ払いが、後始末するのはこつちだぞ、はよ水飲め」

「なんだよ、後始末つて、そんなこと言つて〜、俺一回も吐いたことないんだよ。ねえ〜、えらいでしょ〜」

「……くそが、地味に理性がありやがるから下手な酔っぱらいよりタチが悪いんだよ」

隣に座る彼女が頭を抱えている、ようにみえる。いーや、それとも頭に手を当ててるだけかー？

あつれー。なんか彼女の手が二つ、いや三つあるよーな気が。なんか彼女も二人いるよーな。まあいつか。

「よーし、次は日本酒飲むぞ〜」

日本酒は甘くつて美味しんだよなあ〜、普段あんまり飲まないから、今日はめえーいっぱい飲んでじゃうぞう

「はあ、あいつらもあいつらだ。これ以上こいつの面倒見るのだるすぎつて私に押し付けやがって、なんでこんなやつと一緒にいなきゃいけないんだよ」

「ね〜え、友美ちゃん〜、日本酒ついでよ〜」

「い、や、だ！ 勝手につげ」

「もう〜、そんな悲しい事言わないでさあ〜、たのむよ〜」

「………はあ〜あ、しょうがない。ついでやる」

「！ ありがとう〜！」

友美ちゃんまじ神〜、まじ天使〜

「友美〜ちゃんまじで神い、マジ天使い〜」

「はああ、お前あとで絶対〜」

「じゃあ友美〜ちゃん。お〜ねがいつ〜！」

「……はあ、わかったわかった、ついでやるよ」

友美ちゃんまじ神〜、まじ天使〜、今日もかわいいなあ

「友美〜ちゃんまじで神い、マジ天使い〜、きょうもかわいい

〜なあ〜」

「今のお前、まじできもい」

「えー、そんなこと言わないでよう〜、かなしいよう〜」

あ  
だけど女の子に罵倒されるのってなんかこう興奮するよな

あ

「だけどおんなのこに罵倒されるのってなんかこう興奮するよなあ〜」

「お前もう喋んな、あといい加減水飲め」

「うわーん」

日本酒は甘いなあ、あと友美ちゃんは今日もかわいいなあ

月夜も眠る丑三つ時、二人の喋り声が暗闇に溶け込んでいく。

「へべれけ」

「うっわ、現実でへべれけ、なんて言うやつ初めて聞いた」

こいつ相当酔ってやがる。これ家に帰れるんか？

「ねえ、友美ちゃん」

「ちゃん付けキモい。お互いそんな年でもキャラでもないだろ」

「うわーん、友美ちゃんひどい」

「だからちゃん付けやめろ」

「友美ちゃん、次は家で飲もうよ、自分もう眠たいからさあ」

「は？ 普通にイヤ」

「うわーん、フラれたあ」

「勝手に振られとけクス」

いざとなつてもやる勇気すらないくせに、恋人でもない女を家に誘うなクスが。というかそもそも告白すらしていないだろ。多分人生で一回も。

「うえーん、友美ちゃん嫌わないで」

「安心しな、とっくにお前に愛想つかしてるからよ」

「うわーん、嫌われちゃった」

「はいはい、もぅいいからはよ水飲んで帰れ」

「もうしょうがないなあ、さすがに飲みすぎたし帰って寝るかあ」

「ツチ、クソが、しょうがない」

「やったあ、友美ちゃん大好き」

「……っ、やっぱやめるわ」

「っふいっ、やっぱハイボールさいこー！」

「おまえ、あんなにへべれけに酔っ払ってたくせによくそんな飲めるよな」

「いやあ、だって俺そんなにりよう飲んでもないもーん」

「そうか、……あれか、家にこんなに酒があるってことは、一人で飲んだりもするのか？」

「あれー、友美ちゃんには言っただけえ、俺は自他とも認める酒カスだよ」

「そうか……」

「っ」

「わりの、外でタバコ吸ってくるわ」

「わかったあ、玄関でいいよ」

「ちよつ、おまえ、タバコ吸ってる間にどんだけ飲んだんだ！」  
ああ、友美ちゃんに怒られちゃうよお、まあいいかあ、な  
んか気持ちいいし

「ああ、友美ちゃんに怒られちゃうよお、まあいいかあ、な  
んか気持ちいいし」

「もうそんなことはどうでもいいつ、何杯飲んだの？」

「ええ、うーん覚えてないやあ、」

「いいから、はやく」

「えーと、まずハイボール作ろうと思ったらあ、ちよつとミ  
スってコップの上の線くらいまで入っちゃったんだあ。それ  
でえ、まあいつかーって思つて、そのまま氷とシロップ入れ  
たあ」

「なにやつてんだ、バカヤロウ！ おまえそれウイスキーロ  
ックで飲んでるようなもんじゃねえか！」

「あ、そのあと梅酒も飲んだ！」  
「つち、あー！ しょうがねえ。私が話し相手になつてやる  
から、おまえはそれ以上酒を飲むな！」

「わかった！ じゃあ友美ちゃん、俺お酒もつてくるー！」

「だから、もう酒は飲むな！ あと酒も作るな！ どうして  
もつていうんなら私が持つてきてやるから！」

「わーい、友美ちゃん大好き」

「先に言つとくけどな、私は後始末しないからな」

「つち、ああー眠てえ、久しぶりに飲みすぎちまったみたい  
だ」

「ううー、気持ちわりい」

「おまえ大丈夫か？」

「ああー、ごめーん、ちよつと横になるわー、うえー」

「はああ、だからあれほど水飲めつて言つたのになあ」

あつれいつの間にか友美ちゃんベッドに座ってる。それ  
に目の前にいつもはない巨大なかが見えるような……

「あー、タバコ、吸つてきていいか？」

「うん、もちろんだよお、うえー」

どつかいつちやつた。ま、いいやあ。そういえば友美ちゃ  
ん何飲んでたんだろー。結局全然作らせてくれないから、何  
作つてるのかわかんないんだよなあ。

あ、コップある。せつかくだし飲んでみよ。はあ、お  
いしー。

「人のを勝手に飲むな」

あ、取られちゃつたー。たばこも持つててかっこいいなあ。

そういえばタバコもう半分くらいなくなつたけど大丈夫かな  
あ。

「友美ちゃん、そんなタバコ吸つて大丈夫？ 体悪くな

「つちやうよおえー」

「別にいいだろ、私が早く死のうが私の自由だし」

「そんな悲しいこと言わないでよう、僕は友美ちゃんが死ぬのいやだよお」

「嘘つけ」

いや、だけどタバコはダメだ！一度吸ったらホントに戻れなくなりそう！だから気をつけなくちゃだなあ

「え〜？」

「お前は別に私が早く死のうがどうだろうが、そんな悲しく思わんだろ」

酔いが一気に冷めた

酒の席になのにお互いにもう、完全に酩酊しているのに、急な沈黙が一瞬場を支配した。

「えー、そんなことないよお。どうしてそんなこというのさあ。あ、もしかして、さすがにセクハラ発言しすぎて嫌われちゃったかあ？ねえ、それは謝るからさあ、ゆる

s  
「いや、いいよ。」

彼女はなにか諦めたかのように笑う。いつもと同じはずな

のに、今はなんだか、少し不気味で、怖い。

「私もだいたい酒が回ってきたし、せつかくならいつも思ってたことを言つてやるよ。どうせ忘れるだろうし」

どこから持ってきたのだろうか、まだ火がついたタバコを灰皿に押しつぶし、そしてウイスキーと氷をジョッキに入れ、それを一気に飲んだ。

「お前さ、なんで自分に彼女できないんだろって自虐的に呟いていたけどよお、そりやあできないぜ。だつてさ、お前彼女別に欲しくもないだろう？」

「まあ、なんとなくでしかないが。いわゆる直感つてやつだ。これで私の勘違いだったら何いってんだお前で終わるんだが、多分違うんだらうな。」

「私、昔からいつも直感だけは当たるからさ。それに、今のお前の顔見てたら流石に誰でもわかる」

彼女は少し自虐的に笑った。瞳は吸い込まれそうなほどに黒いが、その真ん中には汚れた灰色がある。どうやら僕は彼女の中でも取り残されているみたいだ。

「そうなつちまったのはさ、怖いからなんだろ」

「お前はすべてが怖いんだ。女の子に振られるのが怖い。自分に下心があるとバレるのが怖い。誰かを傷つけてしまうのが怖いし、誰かを傷つけて自分が嫌われるのが怖い。だから誰かの悪口を言うのも怖い、誰かと話すのも怖い。そもそも」

今」を変えるのが怖い。失敗が怖い。現状維持なんてできるはずないとわかってはいるはずなのに、日常が変わるのが怖い、新しい何かが怖い。それがもしかしたらとつても楽しいものかもしれないのに、自分から這い上がってくる新しい感覚も怖い。」

「割と今のままでも満足して生きていける。それなりに楽しんで、楽しんで生きていける。だから変わっていくものが怖い。自分を変えうる何かが怖い。変化が怖い。」

「怖いから何もできない。女性一人ホテルに連れ込むことができないし、デートに誘うことすらできない。海外旅行なんでもつてのほか。今まで行ったことないお店に入ることもできない。友だちを遊びに誘うこともできない。大切な人にプレゼントをあげることもできない。人を、愛することができない」

「ほら、だって。男の家にそこそこの仲のいい女の子が一人で転がり込んでくせに。ほぼお持ち帰りみたいな状況のくせに。お前は、結局何もできないんだろう」

「ふふっ、そうだよな、変化はダルいし疲れるもんな」

「だから、さ」

「だから私はお前が嫌いだ」

空いた窓からは、脳を冷たくする風と、いつか田舎で聞いた虫の音が入ってくる。彼女の服から漂うタバコの残り香が

鼻に絡みついて離れない。

「はあ、」

「うん、分かったよ。全部当たり前。」

「全部君の正解。おめでとー、どんだんぱふぱふー」

そしたらなぜか、君は泣きそうな顔で

「ほら、やっぱり。こんな風に生身の、本気の人間の気持ちぶつけられると、どうやっていいか分からなくて」

「こわくて、だからそうやってとりあえず逃げようとするんだ」

「つつ」

咄嗟にそれを否定しようとして、だけど否定する言葉が見つからない。

「っ、あーあ、飲みすぎた」

「こんなこと言うつもりじゃなかったのに」

「もし今日のこと覚えとったら、私が全部悪いということにしようくれ」

口から何かが飛び出そうとしているのに。何か、何か言わないといけないのに、

それすらもできない。

「じゃっ、私はここらで帰りますわ。これ以上ここにいても、お互い気分悪くなるだけだろうし。」

もしかしたら、彼女が言っていた臆病がまだ自分を支配し

ているのかも知れない。

結局何も言えないまま、ただドアの閉まる音だけが耳にひどく残った。

そしてスマホを取り出し、よくあるSNSのアイコンをタップした。

目を開けたら隣に裸の女性がいる、なんてことはなく。

が、がんする頭を抱えながら台所にたどり着き水をくむ。半分ほど飲んだところで、ふと玄関を見ると、開いたままの鍵が。

「はああ、流石に昨日は飲みすぎたわあ。」

全部水を飲み干したけど、まだ頭の痛みは収まらない。しようがないからベッドにダイブ。布団が俺を抱きしめてくれる。自分が言ったのは独り言で、もちろん応じる声はない。残念ながらベッドが自分を慰めてくれることもない。だけど

「そもそも、普段の俺なら女性を入れすらしないっつーの」  
一人だからこそ、何も考えずに言える。

「しかも、夜に二人つきりだぞ？ あいつ絶対俺の臆病さ舐めてるだろばーか。」

枕が滲む。どうせ昨日風呂はいる忘れたから汗だろ。やっぱ、枕洗わねえといけねえじゃん。

「どうやらアイツ基準だとまだ勇気がたりねえらしいよなあー。」

「しょうがねえ。とりあえず」

何とはなしに見上げた、生まれた時から様子が変わらないドブ色の空が、俺に過去への夢想を唆している。初めて来た極北の街、旧都市トレデリーの街並みの中でも、油臭そうな雲の群れは変わらず俺を見下ろし続けていた。

「――」  
思い返してみれば、雲の正体は水だと知ったのと、神様が幻想の存在だと理解したのは、大体同じくらいの時期だった。きっかけは確か3年ほど前、稀な豪雨で作戦地域の地面が沼のごとくぬかるんだ、最悪の『仕事』の日だった。

――それもこれも、工場どもが煙を噴き上げるせいだ……！  
雲をこんなに増やして、カミサマの眼を潰してやがる

……！  
――ハッ！ こいつはすげえ！ 神様だったよ！  
――………何がおかしい？

――インヤ？ ただ戦場ここも、随分人気の職場になっちまったなと思つてよ。テメエみたいな世間知らずが入ってくるくらいにはな？

雲とは工場が昼夜問わず噴き上げる塵煙の塊で、それによつて眼を汚されたカミサマが流す涙が雨。

それが、当時の俺に見えていた空のカタチだった。真実を知った今となつては馬鹿馬鹿しい妄想だと理解できるが、降り注ぐ透明な雨に対して、空はこんなにも黄土色なのだから、無理もない誤解だと思う。

「お客さん？ どうしたんですかい？ ぼーっと空なんて見て」

「ああ、いや、何でもない」

「それで、どちらまで？」

先ほど呼び止めた荷運びの老人が、荷引き馬の背を撫でながらげっそりとした声色で尋ねてくる。その声で現実に引き戻された俺は、古ぼけた荷車の座席に座り直しながら、真正面、老人の頭のいくらか上にぼんやりとそびえる尖塔の群れを指さした。

「あの一番奥に見えるやつ。……『真北の魔女』の城まで頼みたい」

頭の上、黒煙の向こうから鈍く黄色い光がのぞく。おそろしく日暮れまでにはたどり着けるだろう。老爺は特に驚いた様子もなく、馬の背を叩いて荷車を動かし始めた。

人気もまばらな旧都の街並みは数日前まで住んでいたオクトベリーのそれとはまるで異なっている。道路整備が行き届いていないのだろう、石畳の道はそこかしこがひび割れ、黒ずみ、苔むしている。顔を上げれば立ち並んだ崩れかけの尖塔が視界を遮り、昔ながらの彫刻めいた壁に鉄筋が張り巡らされて形作られた家々はまるで道行く者を閉じ込めるがごとく入り組みそびえたっている。それを見ているうちにうっすらと寒気を感じた俺は、羽織っていた革のコートの前面を引き締めた。

オクトベリーの仕事仲間はこの街の様を見せれば、こんなところに人が住むなど信じられないと息を呑むことだろう。掃き溜め、ネズミの巢。街も生き物と同じで、死ねば

蛆 虫  
浮浪者どもに集られるということなのだろうか。

ごとりごとり。

荷車は街を這うようにゆっくりと進んでいく。魔女による「技術下賜」が始まって7、8年。ここ最近では街の荷車はもっぱら機械化してしまっているのだ、このように古風な馬車に乗るといのはなかなか新鮮な感覚だ。懐から取り出した

ライター未満の詐欺商品  
絡線式煙草着火器の竜頭をねじって煙草に火を付けつつ、流れていく景色に目を向ける。街道は蛇のように入り組んでい

るにも関わらず、老人はそれほど迷うような様子もなく淡々と馬を動かし続けている。

「あの城には、結構頻繁に訪れるのか？」

「んん？ おかしなこと聞きますねお客さん、あたしがそんな偉いご身分に見えるんですかい？」

運び屋の仕事としてどうなのかを聞いたのだが、すぐその方向へ考えが回らない辺り、訂正しても答えは同じということなのだろう。

政府に無許可とはいえ、魔女は土地の実質的な支配者、王とか領主のようなものである。そこへ向かうのだから、一置かれたりするものかとほんの少し期待してさえたのだが……。

「道に迷うことがないのは、あたしがこれでもこの仕事を始めて長いから。あんたがああ城へ向かうことを意外だと思わなかったのは……あんたが傭兵だから、ですかね」

「……へえ、わかるのか」

俺は反射的にコートの内側に手を伸ばす。愛用のレイピア

スナイデル  
と小銃から伝わる生温い金属の感触が緊張の糸を一気に引き絞る。

しかし直後、老人は俺の変化を気取ったらしく、慌てた様子で平手を顔の前で左右に振って見せる。

「いやいや、それでどうかしようなんて気はねえですよ。ただこの街は人の出入りが少ないですからね。元来運び屋を使うのは余所者だけ。しかも行き先はあの魔女サマのお膝元で、護衛もなしの一人旅。その場の身振りだけで誤魔化せると思ってるなら、あんたまだ詰めが甘いよ」

「なるほど……こいつはしくじったな。他にも改善点はあるか？」

「ええ、あたしに仕事を依頼しに来た時も、足音一つ立てないで歩いてきやがって。まるで猟犬、もしくは狼だ。それ

に、その外套の下の小銃。スナイドル洒落たハット被るようなお貴族

様が野戦用の銃なんて携えるもんかよ」

「……確かに」

老人の言葉をきいているうち、なんだか説教でもされているような気分になってきた俺は、苦い顔のまましゃらくさくになってきたハット帽を頭から取り外して隣に置いた。灰色の髪が生温い外気に晒されてがさがさと揺れる。

傭兵人口が急激に増加しつつある昨今、服装や振る舞いなど、いかに『傭兵に見えないか』がその一つの格を示す指標のようになっていた。傭兵という命がけの仕事をわざわざ選ぶような人間など、ほとんどは持ち金もなく育ちも悪いはぐれ者。その中で先述したような部分に気を配れるほどの余裕が

ある奴というのは、すなわちそれだけの報酬を得てきた実績持ちであるという証拠でもあるのだった。それに身なりを整えると、体裁を気にする貴族どもからの心象も良い。見様見真似とはいえ、この格好を始めてから結構経つし、うまくやれていると思っていたのだが……。

ため息をついて座席に深く座り込むと、老人は空気を悪くしたと思ったのか話題を変える。

「ところでお客さん、今日はどちらから？」

「オクトベリー、首都に隣接した南東の都市だ。もつとも、故郷と呼べるほど愛着はないけれど」

「大都市じゃないですか。何か華やかな話題(ニュース)でも聞かせてくださいよ。こんなジメジメした廃墟街には新鮮な情報ってやつが流れてこないんでね」

新聞は字が細かすぎて読めたもんじゃありませんしと老人は付け足す。本来荒くれの傭兵に投げる質問ではないが、俺の格好や立ち振る舞いからそういった流行にも精通していると予測しての言葉だろう。流石はベテラン、お目が高い。高い金を出してベアトリス製(高級ブランド)のコートを買った甲斐もあるというものだ。

「そうだな……、オクトベリーを収める魔女ドロシーは派手好きというか見せたがりだな、娯楽品をしょっちゅう作っては市場に流しているんだが、その中の自動演劇人形という

のがまた傑作でな。ゼンマイ仕掛けで決まった踊りを繰り返す人間大の人形だが、コイツの造形がまた素晴らしくてな」

「ほお……！ さぞ美しいんでしょうなあ」

「ああ。あまりにも精巧だった上に一時期街中の資産家が買い漁ったもんだから、街中(ゲリ)の戦の時はその辺で拾えるデコイとして重宝したよ」

「あら？ 今何か風向き変わりました？」

「ハハハハ……！」

何かの波長が合うように、俺と老人の笑い声が同期する。死んだように暗いトレドリーの街道を、俺と老爺は和やかに話しながら進んでいく。

「いやしかし、やっぱり都会は素敵な授かり物にあふれているんですね、羨ましい限りですよ」

「？ ここも魔女領だろう？ そこの鉄屑を捧げて祈れば、車輪の付いた馬とか作ってくれそうなものだが？」

「いえそれが、この街の魔女アリス様はずっとあの城に引きこもっていて、市井に姿を見せたことは一度だつてないんですよ。城の中で働いているヤツも多いですが、それでも姿を見たと言っている人には会ったこともなく……つと」

だんだんと口の滑りが良くなってきていた老人の語りがそこで止まった。すぐ後に馬も停止する。視線を前に向けると、そこにあるのは相変わらず一人いない街道。しかし、数年

ばかりの傭兵経験から来る勘が、鼻先にある危険を嗅ぎ取った。

「追い剥ぎか」

「4、5人つてとこですかね。普段はもう少し人気があるんであんまり出くわすことはないんですがね」

不運か。しかし俺は故あつてあまり立ち往生できない身だ。多少の危険は避けようがない。

俺はフロックコートの内側にしまっていたレイピアを抜き、老爺に代金を手渡してすみやかに荷車から降りる。小銃を握った左手はコートの内にしまったまま。

「馬が傷つくと面倒だろう。ここまででいい」

「はいよ。毎度あり、お客さん」

馬車は後ろに下がり、剣を持った男が前に出る。

ここまでやれば鈍い襲撃者共も自分達の存在が気取られていることを察したらしく、建物の隙間から姿を現した。ボロのフロックコートを着た大柄な男が4人。手に持っているのはナイフに手鎌。至近距離から一斉に襲い掛かれたらひとたまりもないだろう。しかし幸いなことに飛び道具は持っていないようだ。

「おい、死にたくなきやその剣を捨てて金目の物を……」

俺はコートの内から素早く銃を抜くと、正面の男に口を向け引き金を引いた。

爆音とともに放たれた銃弾は狙った男の右目を貫き即死させる。血を浴びた残りの男たちは地面にべしやりと倒れる男を驚愕の眼で見つめる。狙った獲物が銃を携行しているとは思わなかったのか、もしくは小銃を見るのが初めてなのか。

「……………」

「お、来ないなら今のうちにと」

硬直する男たちを一瞥し、俺は銃を軽く振って薬莖を排出。次の弾丸を込めにかかる。するとそこまで来てようやくよく認識が追い付いたのか、男たちが一斉に走り始めた。

「やらせるな！ 殺せ！」

「いや！ まずはあの銃だ！ あれを奪い取れ！」

しゃがれた怒鳴り声を口々に叫びながら男たちは一斉に飛びかかってくる。しかしその動きは緩慢で不揃いだ。男たちは各々服の胸元に大なり小なり吐血の跡が見て取れる。おそらく普段から口を覆いもせず工業排気溜まりに住んでいるせいで、内臓が壊れているのだろう。

しかし油断は禁物、人数不利はそれだけで実力差を容易く覆し得る。俺は小銃を薬室が手元に来るよう回転させると左脇で抱え、左半身を後方へ。代わりに右手に携えたレイピアを前方に突き出すように構える。腰を落とし、一カ所に狙いを定める。

横一列に並んで迫る男たちは、しかし「左腕」を狙うがゆ

えに必ずその並びにズレが生じる。左腕から最も遠い向かって右側の男。他の2人よりわずかに前に出ていたその男の喉笛めがけ右腕をねじり、剣を振り抜いた。

「ぼひゅっ……!?!」

右腕の芯を瞬間的に通過する「斬殺」の感覚。

あと2人。頸から血を噴き出し転倒する男の右隣をそのままの勢いで通り抜ける。即座に向き直り、縦一列に並ぶ形になった2人のうち近い方に向けてレイピアを振るが、運悪く手鎌によって防がれる。

「チツ……!」

突きならそう防がれることはないが、誤って深く刺しすぎれば悠長に抜いている間に攻撃を受ける。

俺は切っ先がわずかに刺さる程度の距離感を保ち剣を振りつつ、左半身で小銃の装填作業を進めることにした。手触りだけでブリーチの場所を特定し開くと、袖の内に仕込んでいた予備弾薬を取り出し、銃身と腕の間を滑らせていく。

右手でレイピアを振りながら、左手で弾薬を転がし、薬室へ装填する。曲芸じみた時間は10秒と経たずに終了した。

薬室の蓋を閉じるがちんという金属音が、斬り合っていた男の意識を一瞬そちらの方へ向ける。その隙を見逃さず、一気に剣を前へ突き出して男の首を貫いた。そして引き抜くことなく柄から手を離すと、最期の一人の眉間めがけて引き金

を引いた。

「ぐぶっ……」

「これで全員か？」

血まみれの喉を押さえて倒れこむ男からレイピアを引き抜き、周囲を見渡す。視界内に動く物体は見当たらない。伏兵がいたとすれば既に出てきていると考えるのが自然だ。そこ2、3人なら今更出てきたところで意味はないし、もつといたのなら最初から出てきていた方がずつといい。

しかし、安全を確認し、馬車の老人を呼び戻そうと後ろを振り返った俺の耳に突如として異音が響いた。

ぶしゅううううう……

「ッ……!？」

排出音。聞き覚えはある音だが、さびれた建物ばかりが立ち並ぶこの街道においては全くの場違いな音だった。いやに不気味な感覚を覚えながら振り返ると、街道の奥から何かがゆっくりとこちらに近づいてくるのが見えた。

「なんだ……あれ……」

薄暗い夕方の街道の奥、やってくる「何か」の姿がだんだんと明らかになってくる。近づいてきていたのは1人の人間。

性別はおそらく男、漆黒のハットに外套、時代遅れの嘴仮面

ペストマスク

しかしその顔は俺に比べて大分低いところにある。

なぜなら、男は車椅子に乗っていた。しかしそれは病人が乗るような骨ばった代物ではない。巷のそれよりも二回りはでかく、黒い鉄の装甲のようなもので全面覆われている。車輪は4つあり、前方には巨大な槍が1つと6本の銃身を束ねた連装砲が2門。蒸気機関で自走するのだろう、装甲の隙間からは回転する歯車がのぞき、後方からは黒煙がとめどなく吐き出されている。

現実離れた機構、おそらくこの街の魔女の産物か。ほとんど装甲戦車と言ってもいいその異様な姿に圧倒されていた俺に向けて、男がぐもつた声を響かせる。

「いい傭兵だなあ……君……」

初老くらいの男の声。しやがれた低音はまるで地面を伝って聞こえてくるようだ。男は手袋をした両手の指を擦り合わせながら、ゆっくりと車輪を転がして近づいてくる。

「殺しに慣れ、気品さえ垣間見える……。それにとっても器用だ。銃と剣を同時に操るなど……少なくとも、私は……初めて見た」

地面の凹凸に金属の車輪が押し付けられる音が次第に大きくなり、それに合わせて鼓動の音も大きくなっていく。

——よくわからないが、この男は危険だ……!!

何故目の前の男が自分に敵対するとわかるのか、その根拠は自分にもわからない。だが己の内側にいる何者かが、今す

ぐその男から離れると警笛を鳴らし続けている。

「だが……この掃き溜めにいるということは、その能ももうじき失われてしまうのだろう……」

「哀しいことだ。空しいことだ。……なればこそ、『保存』しなければ……。朽ちてしまう前に……」

——まずい……！

殺し合いという異常な経験を繰り返すうち、価値観の狂う人間というのは往々にして存在する。理の合わない信念を得た男、理を捨てた男、理に適おうとして全てを狂わせた男。そういった狂人特有の臭いが、目の前の男からは嗅ぎ分けるまでもなく濃く漂ってくる。当然これまでに似たような人間に戦場で出会ったことはあり、今の今まではそうだった彼らがどこで何をしようがどうでもいいとばかり思っていたが、いざ自分が狙われる立場になってみれば、なるほどこれだけ存在そのものが疎ましい人間もそうはいない。俺だけは絶対こうはなるまい。ひっそり心に誓う。

放射状に開かれた連装砲の射線が既に退路を塞ぎ、正面の槍が俺の身体を真っ直ぐ見据えている。隠れる場所のない細い街道。ここはすでに奴の狩場だ。左右の銃で退路を塞ぎ、高速の突進で刺殺……いや、あれだけの質量が突進してくるのだ。槍に当たらずとも挽肉は避けられないだろう。

そうこうしているうちに猶予時間が切れる。男の乗った車

椅子から大量の蒸気が排出され、鋼鉄の車輪が石造りの道の上で空回って火花を散らし始める。

ギギギギギイッ！

——来た……ッ！

そう思った次の瞬間には、視界の全てが「敵」の姿に埋め尽くされていた。真正面からの突撃。予測通り左右の砲門からは弾丸が発射される。猛烈に噴き上げられる黒煙と蒸気が周囲の情報を遮断し、敵のシルエットを実際よりもはるかに巨大であるように感じさせる。一か八か、俺は斜め上方向に跳躍しすんでのところで攻撃を回避する。そして着地と同時にコートを翻し、自身に纏わりつく黒煙を振り払った。

「ゲホッ……ゲホッ……」

肉薄に伴い通り過ぎた地を擦る轟音、吸い込まれる風、飛び散った火花の熱さのすべてが、一拍遅れて脳に認識される。未だ1秒と経たない過去、自身のすぐ隣を「死」が掠めていったという自覚。今なお強い存在感を放つ足の振動が、視線の先の車輪によるものか脚そのものの震えか判別できない。

「ほお……避けるか。期待以上だな」

払いきれなかった煙に咳き込みつつ男を見据える。もうもうと噴き上がる黒煙で視界は悪いが、車椅子（バケモノ）の動きは正確に見て取れた。高速で突進した反動で方向転換はスムーズに行えないらしく、男はこちらへ向き直ろうと道幅全体

を使って大回りで旋回している。

逃げるのなら今しかない。俺は男に背を向け全速力で走りだす。速度では敵わないだろうが、離ればそれだけ銃弾に晒される危険性は下がる。肘置きあたりに固定されたあの砲門では狙撃は不可能だろう。あわよくばそのまま撒けないかとも考えたが、方法を思いつくより先に、排気と金属摩擦を混ぜ合わせた轟音が迫ってきた。

「うぐッ!？」

振り返る暇はない。咄嗟に先ほど同様斜めに跳んだ俺は、再び突進の回避には成功したものの、やむを得ず跳んだ先の建物の壁に取り付けられた鉄筋で脇腹を強打してしまう。痛みから着地に失敗し地面に転がる俺の耳に、男の声が降り注ぐ。

「また避けたな。しかしあと何回同じことができる? 言っておくが、ここで私に動力切れはないぞ?」

そう言うと、男は自らの足元、建物の隙間から伸びていた管のようなものを取り、車椅子の横に繋ぐ。どくどくと音を鳴らしながら、車椅子の動力機構に水が充填されていく。

——マジか。確かにその大ききさじゃボイラーの水は何秒ともたないとは思っていたが……。

よく見れば今男がいる場所だけではない。周辺の建物の間、様々な場所から同様の管が道端へ伸びているのが確認できた。

おそらくここら一帯が奴の狩場。水を使い切らせるのは勿論、管1つ1つを破壊して回るのも得策ではない。

「諦めたまえ。君、もう詰んでいるよ」

痛む身体に鞭を打ち立ち上がった俺の眼前に、12の銃口が同時に突きつけられる。

逃走は困難。撃退は不可能。停戦などもつてのほか。絶望的な状況の中で、けれど俺は降参とか諦めなんてものはまっぴらだった。

——銃はどうだ? ……ダメだ。ヤツの身体に届かせるには障害物が多すぎる。接近戦……旋回の時間を狙えばあるいは……いや、急いで走ってもおそらく間に合わない。そもそも次の弾幕をどう躲す? 考えろ……他に策は……!

引き金が引かれるまでの幾ばくも無い時間、走馬灯のように思考が巡る。しかし所詮は悪足掻き。現実逃避以外の意味を為すことはなく、最期の瞬間は無情にも過ぎていく。

——ダメだ……!! もう時間が……!! 死——

ゆつくりと絞られる引き金を幻視し、思わず歯を食いしばる。

しかし、いよいよ死が確定するかと思われた次の瞬間、鋼鉄の怪物は突如として『爆発した』

「なッ……!?!」

状況を理解する暇もなく、俺の身体は爆風によって後方へ

吹き飛ばされる。前後不覚になりながらも、俺は身体を丸めて頭を守り、何とか無事に着地する。顔を上げると、先程まで自分達が立っていた辺りには巨大な窪みができていた。その中心にあったのは、乗っていた車椅子が跡形もなくひしゃげ、上半身の四散した嘴仮面の男。破損の仕方から見ると、それは内側から爆発したのではなく、外側からの強い衝撃があつたらしかつた。

「大砲か……？ それにしてもどこから……」

凄まじい破砕音から来る耳鳴りも消え、静まり返った辺りを見回す。すると上の方、家屋の屋根を照らす白い円状の光が目に入った。灯台の灯りのような強い光。その光源に目を向けると、その先は聖堂のような巨大な建物の屋根の上。逆光ではつきりとは見えないが、そこに立つ不可解なシルエットが確かに確認できた。

「……人、か？」

頭の位置から光を放つ、四肢を持ったナニカ。しかし、屋根と比較してもその姿は明らかに大きすぎた。全高は一般的な家屋の2階分、いやもっともあるかもしれない。

いくら謎多き魔女の領地とはいえ巨人なんて胡乱な存在あるわけがない。あれこれと思考を巡らせているうちに、その影は聖堂の屋根の後ろへ姿を消してしまう。俺はそれがいた方向へ走り出す。都合のいいことに聖堂の先には目的地、真

北の魔女の城がある。打撲であちこち軋む身体を奮い立たせ、荘厳な聖堂——よく見るとそれは既に廃墟になっているらしかつた——の前を通り過ぎる。最後の曲がり角を抜けると既に巨人の姿は跡形もなかつた。しかしその代わりに、ようやく目の前に目的とする城の全容が姿を現した。

「何だ……これは……ッ！」

城そのものは、それまでにも何度か見る機会があつた。そのほとんどは堅牢な石造りの城塞。しかし今日の前に広がっているものは何もかもが違っていた。先ほどの聖堂にも似た、細やかな装飾が施された複雑な壁面の造形と立ち並ぶ尖塔。移民文化に根差した一昔前の建築様式だったか。なんにせよ、城に用いられる例は少ないものはずだ。

問題はその材質である。全て金属だ。いや、正確には全てではないのだろう。ステンドグラスを始め城にはいくらかの色のグラデーションが見て取れる。しかしその大部分は黒く塗られた金属でできていた。排気で濁る空、廃墟まみれの旧都市、そしてその最奥に構える漆黒の城。まさしく魔女の巢といった薄暗い圧迫感。そして何故金属にする必要があつたのかも外観からすぐに判断がついた。

「蒸気機関……まさか、城全体が……？」

尖塔の間から立ち上る黒煙と、壁の隙間のそこかしこから見える歯車たち。さながら時計仕掛けの超巨大版と言ったと

ころか。城全体を機械のパーツにするのだから確かに材質は金属以外ありえない。しかしそれだけ巨大な機構を作って一体何をしているというのか。その正体が危険なものである可能性も十分にあるだろう。

——ここまで来て、引き返すわけにもいかない、か。

煙草に火をつけ、ポケットに入れていた招待状を取り出す。

求人票

それは今は亡きオクトベリーの友人から譲り受けた、最後の寄る辺とも言えるものだった。

傭兵依頼…1年以上の契約。

業務内容…契約時に通達

報酬…定額報酬、月70ポンドル 特別手当アリ

優秀な傭兵を求めるその求人は、目もくらむ高給をちらつかせる代わりに、業務内容の一切が秘匿されていた。

しかし、眼前の魔境こそが、金も仲間も失った俺にとっての最後の希望。

俺は胸いっぱい煙草の煙を吸い込むと、ゆっくりと吐き出す。腹の奥にたまっていた膿のような不安を無理やり押し流すような感覚。最後の一息を吐き終われば、その先の俺に迷いはない。

「行くか」

落とした煙草を踏みつけ、俺は眼前の城へと歩き出した。ぎりぎりまで沈んだ黄土色の夕日が、煙る建物のシルエットをぼんやりと浮かびあがらせていた。

7年前、島国へイルランドに「魔女」と呼ばれる8人の才女が姿を現した。

前提として、歴史という目線で見れば、「天才」なんてものはある種ありふれた存在だ。それを踏まえてなお彼女らがそのような異名を獲得した要因として「先進性」のほかにもう1つ、「秘匿性」があつたことは疑いようもない。

具体的な技術経路を秘匿し、魔法の如き効果をもたらす「製品」のみを市井に提供する。「魔女」達のそういった在り方は学者や政府からの批判と、その数十倍の規模の民衆からの支持を獲得した。結果としてイルランドはそれぞれの魔女の実効支配領域と首都の計9領域に分裂し、各領域の思惑が複雑に絡み合う内戦状態へと突入した。

「真北の魔女」アリスは、8人の魔女の中でもとりわけ異質な立ち位置で知られていた。人のいなくなった旧都トレデリーに城を構え、恩恵を求めて集まってきた浮浪者たちにも決して姿を見せることはない。ただ製品を生み出し、販売す

る。容姿も思惑も一切が不明。「その姿を見た者は誰一人として生きて帰れない」という噂さえ立ち上がるほどだった。

「オオーコレガ魔女サマノ才城カア！ 大キイナア凄イナア！」

荘厳な門をくぐってから城内の廊下に至るまで、敷地内には不気味なまでに人の気配が存在しなかった。試しに大声を出してみても反応はない。ただ蒸気機関が発しているであろう断続的な駆動音が四方から聞こえ、それだけがこの城が今もなお現役であることを示している。

「……アポも何も取ってないんだから衛兵の1人もいてくれないと都合が悪いんだが……」

意図せず不法侵入になっていないかという不安。せめて音を殺すのは控えようと思ったことは遠慮なく口に出していく。

因みに、一見不在であるように思われても帰るといふ選択肢はハナから存在しない。何しろほんの数日前、「北西の魔女」の軍事作戦の余波で俺は自宅と財産の大半を失ったばかりだ。住めればいいとオクトベリーの物件の中でもひとときわ安いのを借りていたのだが、その値段の理由が「戦地に近いから」であるという部分を完全に失念していた。銀行の預金は何のために存在していたかを理解しても時すでに遅しであり、俺

は手元に持っていたわずかな路銀を除く全財産、そして住処を焼失し、今現在路頭に迷いかけていたのだった。

「誰かいませんか……って、そもそもどこに向かえばいいんだ？」

城と呼ばれる建造物には、以前にも何度か仕事で訪れる機会があった。しかしこの城の内装はそれらとは異なりかなり風変わりだと感じる。外面の殺風景さとは対照的な、木や石、布を用いた温かみのある廊下は、城というより館のそれに近い。絵画的なブラウンベースの廊下が縦方向に思い切り引き伸ばされたような異界情緒あふれる空間設計は意識を現実から引き離し、方向感覚を狂わせる。ふらつくような幻覚を覚えながら、迷宮じみた廊下を右へ、左へ……。

「……あれ、ここはさつきも通らなかつたか……？」

徘徊すること十数分、俺の頭を遭難という言葉がよぎった次の瞬間、今歩いている廊下の壁が音を立てて動き始めた。

「なっ……!!？」

突然の変化に身体が強張り、自然とコートの内側の武器に手が伸びる。金属が動くごりごりという音が数秒続いたかと思うと、ぴたりと静かになる。

←



ず侵入したのだ。最初はろくに取り合ってもらえないだろう。そうした俺の予測は、あまりにもあっさり覆される。逆光で陰る少女の瞳は、俺の素性も目的も全て見通しているようだ。困惑する俺を無視するように、魔女は話を進める。俺の手の中にあつた招待状に目を配ったのでおずおずとそれを差し出すと、彼女が椅子に取り付けられたハンドルを回し、背後から機械の腕をうねうねと伸ばす。精巧に象られた金細工の五指が俺の手から書類を取り、それを彼女の手元へ運ぶ。受け取ると彼女は契約書を取り出し、碌に確認もせずにサインを書いてしまった。

「はい」

「おお」

契約完了。邂逅からわずか20秒程度の出来事。

不気味な廃都市トレドリーを抜け、賊や殺人車椅子と戦い、この世ならざる風貌の城に意を決して踏み入れた。その壮絶な旅路の終着点としては、あまりにもあっさりとした決着だった。

状況を掴み切れず手持ち無沙汰気味に振る舞う俺に対し、魔女が口を開く。

「採用理由などは省略します。過不足のない会話ほどつまらないものはないわ。それよりも折角の機会なのだから、余計な話をしましょう。——ところで貴方、敬虔な聖教徒だっ

たりする？」

「い、いや？」

「そう。じゃあ聞くのだけれど、貴方、神様はどこにいると思う？」

「はあ？」

俺は首を傾げた。直前に聖教徒ではないと確認したにもかかわらず、神様の在り処がどこかだど？ 意図を理解できず固まる俺に魔女は言葉を続ける。

「教徒の数が多すぎるから『神様』という言葉自体が聖教の主神を指すと勘違いする人は多いけれど、本来人それぞれ、思い描く神様には様々な形があるわ。1人であったり複数であったり。人の形をしていたりそうでなかったりね。けれど私は、それら全ての神は一樣に、この世界において同一の場所に存在すると考えているの」

「なんだそれ……空の上とか、海の底とかか？」

「いえ、ここよ」

魔女はそう言つて自分のこめかみのあたりを指さした。あまりにも拍子抜けのその結論に、俺は思わずため息をつく。

「なんだ？ 所詮は妄想ですって話か？」

「いえ、妄想とは違うわ。神は、宿主には制御不能な存在

としてあらゆる人間の脳(こころ)の中に独立して存在しているの」

「?」 どういうことだ?」

疑問を呈す俺を見下ろしながら、彼女は人差し指で自身のこめかみをぐりぐりと押すジェスチャーをして笑った。

「まず私が神が頭の中にいると考えた理由についてだけ、これは単純で、信じる人のいない世界に神は存在しないから。無人の荒野に神の律は在り得ないでしょう? ならば神は人の内側にいると考えるのが自然」

「……なるほど?」

存在すると一旦仮定して、外側をいくら探してもいないのなら、内側にいると考えるのが自然。……まあわからなくはないが釈然としない。

その思いを特に態度に出したつもりはなかったが、魔女は俺を一瞥しさらに言葉を紡いだ。

「釈然としないのは、名前から神を人格を持った生き物であるかのように認識してしまうから。あくまで私の解釈だけれど、神とはすなわち絡繰システム。ある時は人を導き、ある時は罰を与えるけれど、それは機械的な動作。在り方としては臓器システムに近いと言つてもいい」

「人の中に在る臓器システムが、人を導く……?」

荒唐無稽な話だ。現実感は一切ない。自分の身体が自分で

ない誰かに操られていると感じた瞬間など俺には生まれてきてから一度もない。

納得いかない、という感情を俺は今度ははつきりと態度に示した。腕を組み、眉を顰めて高いところに座る魔女を見据える。だが、どうやらその反応すらも彼女にはお見通しであったらしい。

「その神には名前が付いている。『当たり前』『常識』と言えはわかるかしら」

「常識……」

魔女は懐をごそごとと漁ると、一本のライターを取り出し、俺に投げ渡す。

「貴方、煙草を吸うでしょう。試しに1本吸ってみて頂戴」

「わ、わかった」

わざわざライターを投げ渡したということは、それを使いということだろうか。俺はいつも通り紙煙草を1本取り出すと、渡されたライターの蓋を開いた。

「ぶおっ!?!」

しかし、蓋の内から飛び出したのは火ではなかった。勢いよく噴出されたのは水。煙草もろとも俺の顔に飛び込んだ。それは、ものの見事に俺の喫煙を台無しにしてしまった。

「お、お前ッ!」

「私は1回もそれをライターだとは言っていないわ。それ

は小型水鉄砲」

予想外の攻撃に俺は魔女を睨みつけるが、一方の魔女は動じることもなく微笑んだままだ。しかし俺を掌の上で転がすのがさぞ楽しいのか、彼女の怪しい笑みには、しかし同時に悪戯に成功した子供のよう無邪気さがわずかに垣間見えたような気がする。

「優秀な傭兵である普段の貴方なら、赤の他人に渡されたものは警戒するのが自然じゃないかしら？ けれどこの状況でまさか騙されるなんてありえないという『常識』、あとその形の物体はライターでしかありえないという『常識』が、貴方に考えるというプロセスを放棄させた。どう？ 理解できた？」

「……今のは単純にあんたに騙されただけじゃないのか？」  
「例えば、私に悪意がなく完全なうっかりでそれを渡していたとしても、結果は同じだったと思わない？」

コートの裾で濡れた顔を拭きながら、確かに俺は内心で頷いていた。つまりは「思い込み」だ。確かにそれは常識という外付けの観念に騙されたと表現することもできる。内側に巢食う神の存在を認識した俺の頭に、しかし今度は別の疑問が湧いてくる。

「一理ある。だが、それはあくまで『常識』という概念が人を騙すというだけで、聖教なんかの『神様』に繋げるのは

違うんじゃないのか？」

「信仰は深まれば深まるほどその実態を『常識』に近づけていくわ。敬虔な教徒達にとって、世界は神がいる前提で構築されているの」

——あ……。

彼女の言葉を聞いて、俺は城に来る前思い出した自分の過去に思い当たる。

——雨は、神様の流した涙……。

今思い返せば馬鹿馬鹿しい神話。だがその瞬間の俺にとって、それは確かに真実で、世界のありのままの姿だった。つまりは常識だ。

「聖教が衰退した理由、その最も大きなものの1つは、『神は存在する』という『常識』を疑う人間が増えたから。教会の腐敗によって、信じ続ける恩恵よりも騙される不都合の方が上回った。さらに科学という実体を持つ規範の登場によって、聖教は『常識』の座から降ろされてしまったの」

魔女は椅子についていたハンドルを右手で回し、左手の指で細かい絡繰を操作する。椅子の後ろに取り付けられた科学の申し子たる絡繰腕がこちらに向けてピースサインを作った。  
「いつの時代も、人は神様のために争い合ってきた。けれどその実態は結局欺瞞にまみれた虐殺に過ぎなかった。科学がそれに置き換わったことで、人は欺瞞から解放されたとか、

これからは真実の時代とか言う人が時々いるけれど、私に言わせれば根幹は何も変わらない。いくら科学が正しい結果を導いても、観測者が嘘をつくだけで台無しになってしまう」

さつき私がやって見せたように、ね。

そう言つて魔女は絡繰腕を手で無理矢理椅子の後ろに押しつけた。

「そして今のこの国ほど、それが顕著な世界もないわ。魔女領では魔法のような技術が次々発展してまるで理想の世界のように見えるけれど、実際は基盤ガタガタ、欺瞞と打算に満ちたハリボテの理想郷。音を立てて崩れる前に、巻き込まれて命を落とす人の数を少しでも減らさなくてはならないの」

そう話す彼女の顔からは余裕のある笑みが消えていた。顎を上げてこちらを見下ろしながらも、その視線はまっすぐ俺を見つめている。

「だから、私は全ての魔女の打破を目指す。そのために、貴方の力を貸してほしい」

優雅な、丁寧な所作で、彼女はこちらに左手の甲を差し出した。協力を持ち掛けるその言葉遣いとは裏腹に、あくまでも人の上に立つ者として恭順を要求しているらしい。傭兵としては馴染みの薄い感覚だったが、長期契約なのだからそれくらい必要だろう。報酬、待遇を踏まえても断る理由はない。

「ああ。これからよろしく頼む」

俺はつかつかと彼女に歩み寄ると、その前にひざまずき、差し出された左手に口づけをした。すると彼女は手を翻し、俺の顎や頬を優しく撫ぜる。

そして直後、その手の親指をかくんと曲げ、長く伸びた爪を俺の眼球ギリギリに突きつけた。

「——ッ！」

「最後に1つだけ。『常識』という皮をかぶったハリボテはどこにでもある。目の前にある者が真実であるとは限らないわ。私の役に立つために、疑いなさい、傭兵」

近すぎてぼやける細長い指の奥、魔女は椅子から下り目線の高さをこちらに合わせていた。獲物を見据えるような不気味な顔に思わず俺は唾を飲み込んだ。

「名前を聞いてもいいかしら」

「あ……ああ、カイ。カイ・オーガスタだ」

「そう。改めて、私はアリス。姓はない、ただのアリスよ。」

これからよろしくお願いするわ、カイ」

彼女はそう言つて手を離し、首を傾けながら今までで最も明瞭にニコリと微笑んだ。

「捕まった」「もう逃げられない」

予感にも似たそんな言葉が俺の頭の中で延々と繰り返されていた。

## 太陽の焼き方

明倉有斗

目の奥からじりじりとした痛みが染み出してきて、しばらく瞬きを忘れていたことに気がつく。無意識のうちに身を乗り出すようにしながら睨みつけていた液晶から顔を離す。

曲がつっていた背骨を伸ばすと、ばき、という音がした。骨に引っ張られるようにして、肩甲骨あたりの筋肉や皮が引き攣れた感覚がする。

私しかない部屋の中はしんとしていた。少しでも作業を楽しいものにしようとなんとなく選んでスマホから流していた音楽は、いつのまにか止まっていたらしい。自分で止めたのか、勝手に止まったのかさえも覚えていなかった。

目の前に開いているワードファイルに視線を戻す。そしてちよつと驚く。文章二割、何も書いていない余白八割といったところ。全く進んでいない。部屋の壁にかけた時計を見ると、前回それを見た時からかなりの時間が経っていた。なのに、これだけ？ 内臓を全部吐き出してしまっそうなくらい深いため息が出る。

そうしているうちに、目の奥だけじゃなくて、こめかみの辺りも痛い気がしてきた。思わず大きな音を立ててパソコン

を閉じてしまう。文章を書くことは好きだけど、今みたいに恐ろしく進まない時は何でこんなこと始めてしまったんだろうとか思ってしまう。

不意に胃が鳴って、身体の奥から空腹感が駆け上がってくる。このお腹の空き方も好きじゃない。大したことも成してないのになんでエネルギーだけ消費するんだろう。でもその感覚には抗えずに、席を立つ。その瞬間にパソコンの横に積んでいた大量の本に手が当たった。ばさばさと音を立てながら崩れていく本を元に戻す気にもなれなくて、そのままにして部屋を出る。

キッチンを満たす空気はひんやりしていた。フローリングの床も冷たくて、足の指が上に反り返るようになってそれに触れるのを嫌がる。冷蔵庫を開けるとその中の方があったかいような気がした。卵とタッパーに詰め込んだ一食分の白ご飯を取り出して、冷蔵庫の扉を閉める。

白ご飯の方は、そのまま電子レンジに突っ込んで温め始める。卵を片手に握りしめたまま、棚からフライパンを引っ張り出してコンロの上に置く。油を適当に流し入れて、火をつける。コンロの周りの空気が少しずつ温もりを持ち始める。

しばらく待って、油がフライパンの上で良く動くようになったら、そこに卵を割り入れる。かんぺき。殻の一つも入らず、黄身も割れず。思わず口角がちよつと上がる。ぶるんと

した濃いオレンジ色の黄身の周りで、白身がちよつとずつ外側に広がっていく。その輪郭はうのようによとして、何か四方八方に手を伸ばそうとしているみたいだった。もしくは、周りに光線を飛ばす太陽みたい。しばらく火を通して、白身の縁が茶色に焦げるまで待つ。端っこがカリカリになった方が好き。

太陽的目玉焼きを焼きながらぼうつとしてっていると、電子レンジが鳴った。こっちもそろそろいいか、と適当な皿に目玉焼きを移す。じゅうつといい音を立てて皿に滑り込んだ太陽的目玉焼きは饒舌にしゃべり出す。

「わー、見て見て。先の方に茶色いラインが入ってるの超おしゃれ。それなのに、内側の白身と黄身には半分熱が通って、半分生のままで、きゅってしててすごくない。ねえねえ、あなた目玉焼きのプロ？ 略してめだプロ？ こんな上手に焼いてもらえるなんてハッピー、でも本当はだし巻き卵になりたかったんだけど、でもでもオツケー！ 個人的おすすめは白だしかマスタードをかけて食べてくれることだけど、そこんとこどう？」

電子レンジから白ご飯を取り出すと、ホカホカと温かい。コンロの横の調理台の上に並べて、箸を取り出す。食卓まで持っていくのも面倒くさいくらいにはお腹が空いている。白ご飯のタッパーの蓋を開けると、一気に蒸気が湧き出してき

た。

「えー、何でこんな可能性今まで思いつかなかったんだろう、でも今思いついちゃったから言っちゃうね。ごま油なんてどう！ 目玉焼きに何かけるか論争に一石を投じちゃおうよ。え、でもこれって私が知らないだけで意外とメジャー？ そんなことないよねえ、ごま油目玉焼き、略してごぶ焼き！ なんかあんま響きかわいくないね？」

まず白米を口の中に入れると、湯気が一気に喉の奥にぶつかってむせそうになる。箸で白身を一口分切って、それも口の中に放り込む。

「ぎゃー、うそでしょ。まさか何もかけないで目玉焼き食べる派なの。醤油、いやこの際塩でいいからかけてよ。やだよ、素材の味楽しまれるのいちばん恥ずかしい。この際言うけど、あんま自分の味に自信ないんだよ、だって賞味期限切れかけてるから！ もっと早く食べてくれればこんなにぎゃあぎゃあ言わなかったよ。でも、でもさあ、でもでも、ぐえ」

黄身の部分に箸を立てると、中から半熟の黄身がとろりと溢れ出してくる。マグマみたいに盛り上がって決壊した黄身は、白身の上にゆつくりと広がっていく。外側から一口ずつ、黄身を皿の上にこぼさないように慎重に食べていく。まるやかな黄身と、ぷるぷるの白身と、カリカリの縁が交互に口の中に入って消えていく。

気がつくくと、目玉焼きも白ご飯もぺろりと平らげていた。唇についた黄身を舐めとって、シンクで洗いを始める。冷水が肌に刺さって、びりびりする。でも、頭がさつきよりもはつきりとしてきた感覚がする。

水切りマットの上に食器を並べて、洗面所に向かう。丁寧に歯を磨いて、ついでに顔まで洗う。濡れた前髪が額に張り付く。顔の上に知らぬ間に降り積もっていた埃を流し落とし、たみたみに、すぐくさっぱりする。

私は部屋に戻る。机の上や下に、本が散らばっている。一つずつ拾い上げて、元の場所に戻す。椅子に座って、パソコンの画面を開く。お腹の奥が温かくて、ちよつとだけ騒がしくてもぞもぞする。再び目の前に現れたワードファイル。ちよつとだけ書いていたその文章を読み返して、キーボードに指を置く。新しいアイデアを思いついたわけじゃないから、そのまま止まってしまうけど、さつきみたいに後ろ向きな気持ちじゃない。もう無理脳味噌の中身そのまま引っ張り出してワードファイルに貼り付けたい、とか言う気持ちじゃないから、まあ頑張れば書けなくはないな、って感じ。

お腹の中に沈んでいった太陽、に似た目玉焼きと、それから白米が作った熱がゆっくり指先に灯っていく。

かた、と静かな音でキーボードを叩き始める。次第に綴られていくそれは、嘔吐にも排泄にも、涙にも血にも、呼吸に

も似ている。





あとがき（作品掲載順）

海葵

俺やっぱセピアしてて良かった

日々規

靴下にローズマリーが入ってた。なぜ!!

迷走少女

後輩が出来て初めて卒業した先輩の気持ちがあった。もつと迷惑かけてやればよかったぜ

蟻 まい

入院しました。引っ越ししました。初詣に行きました。

春日あるみ

風呂場の換気扇が壊れて回り続けてる。ガチ寒いつて。

宵蘭

2025は月と紅と爪の話ばかりしていたようです。今年も何卒。

霧雨 蒼

おみくじは大吉だったので今年が良い一年になるはず

宇津朝陽

登場人物が魅力的になるよう構成と表現能力を身に付けていきたいです。やっぱ小説書くのって難しいわあ

超矮小

推敲に取り掛かるのが遅すぎたせいで三分の一しか期限内に仕上げられなかった弱き者……

明倉有斗

とりあえず、4年間出し通せてよかったです

## 編集後記

カール

『フピスラズリ 2026 新春号』をお読みになってくださり、ありがとうございます。今回の新春号より、新しく編集を務めることとなりました。カールと申します。以後、2026 紫熊号までの間、よろしくお願いいたします。

初めての編集ということ、かなり時間をかけてしまいました。手伝っていただいた先輩方には大変ご迷惑をおかけしました。この場で謝罪と感謝を述べさせていただきます。

ここから、私個人の話にはなってしまうのですが、私自身来年度から大学生二年目を迎えます。これに合わせて、目標がございます。次期幹部となる同期同士の交流を深めることです。以前から考えていたのですが、次期幹部となる同期同士の交流は、現状少ないです。このままでは、来年度の部会の運営に多少の影響が出てくると考えています。これは特段、誰かしらが悪いという話ではございません。

しかしながら、この状態を続けるわけにはいけないので、色々と策を練っている次第です。タスクは増える。

これまで、文芸部の方々にはお世話になってばかりでしたので、その恩返しとして、編集含め来年度は先輩として活動に励んでいく所存です。来年度は果たして、どのような人達が部に集うのでしょうか。不安で仕方ありません。

今回の後記は以上とさせていただきます。改めて、ここまで読んでくださりありがとうございます。そして、ご寄稿いただいた部員の皆様、ありがとうございます。

ラピスラズリ

【発行日】2026年2月12日

【発行者】文芸部

2026 新春号

【本誌使用写真】部員撮影

## ☆文芸部(旧文芸サークルセピア)☆

【活動日】毎週月・金 18:30~20:00

【活動場所】全学教育棟2階 C211教室

【X(旧Twitter)】@Sep\_1A

【Instagram】@bungeisepia

※Zoomにて活動している場合もあります。

年に4回、『ラピスラズリ』(本誌)を発行しています。

毎週の部会では、部員の作品の批評会や、リレー小説、シャッフル短歌や俳句や言葉遊びなどのレクリエーションを行っています。

創作をやってみたい方は、小説・短歌・俳句・詩・絵本から評論まで、ジャンルフリーに募集中。

もちろん、自分では創作をやらない、一介の文学好きも大歓迎です。

「言葉について熱く語りたい」「好きな本についてまったり語りたい」「暇で仕方がないのでなにか面白い本を教えてください」……あなたのそんな秘めたる望みが叶ったり、叶わなかったりします。

最新情報はX(旧Twitter)&Instagramにて公開中。質問等はDMで。

見学お待ちしております。

Thank **you** *for* reading.